躍、止利加利字上、據一本改、○騰原在躍超天、我耶護留田耶搜理阿佐食無志岐耶雄々伊志岐耶、

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年八月七日戊申、散位從四位上文室朝臣卷雄卒、○中略卷雄身體輕捷、甚有意氣、嘗戲騰躍、脚踏駕車牛額、超越立於車後、及爲少將、白晝有狐、走東宮屋上、卷雄奔登、拔劍斬之、凡其驍勇過人、皆此之類也、

〔陸奥話記〕卽日○康平五年九月六日欲攻衣川關、○中略武貞○清原攻關道、賴貞○橘攻上津衣川道、武則○清原攻關下道、自未時迄戌時、攻戰之間、官軍死者九人、被疵者八十餘人也、武則下馬廻見岸邊、召兵士久清命曰、兩岸有曲木、枝條覆河面、汝輕捷好飛超、傳渡彼岸、偸入賊營、方燒其壘、賊見其營火起、合軍驚走、吾必破關矣、久清云、死生隨命、則如猿猴之跳梁、著彼岸之曲木、牽繩纏葛、牽卅餘人兵士、同得越渡、卽偸到藤原業近柵、俄放火燒、

〔古今著聞集九武勇〕同○源義家朝臣若さかりに、ある法師の妻を密會しけり、件の女の家、二條猪隈へん也けり、築地に棧敷をつくりかけて、棧敷のまへに堀ほりて、其はたに蘇などをうへたりけり、すこぶる武勇立る法師なりければ、用心などしける所也、法師のたがひたる隙をうかゞひて、夜ふけてかの堀のはたへ車をよせければ、女棧敷のしとみをあげて、すだれを持あげゝる、其時とび入けんはやわざの程、凡夫の所爲にあらず、此事たびかさなりにければ、法師聞つけて、妻をさいなみせためて問ければ、ありのまゝにいひてけり、さらばれいのやうに我なきよしをいひて、件の男を入よ○よ原作ま據一本改といひければのがれがたなくて、いふまゝにことうけしぬ、棧敷をあげて、れいのやうに入たらん所を、きらんと思て、此法師其道に圍碁盤のあつきを、楯のやうに立て、それにけつまづかせんとかまへて、太刀をぬきてまつ所に、案のごとく車をよせければ、女れいの定にしけるに、とびのをの方よりとび入ざまに、烏のとぶがごとく也、ちいさき太刀をひきそばめて持たりけるをぬきて、とびざまに碁盤の角を五六寸計をかけて、とゞこほりなくきつて